

山の至福

19代 草苺 健

山々が生活の中心にあったころ、よく、ギッフェルグリュックという言葉を使っていたことを思い出す。ドイツ語はまったくできないのに、「山上の憩い」などをやや哲学的装飾にまぶしたいとき、この言葉は呪文のようで便利だった。そう、山はただの遊びではないのである、と思いたいときや言いふらしたいときにとりわけ重宝であった。本当の意味はともかく、「絶頂感」とか「このうえない喜び」という風に当時は理解していたと思う。そこには「場所」や「行為」など、この感覚を呼び起こすいろいろな根源はあるのだが、すぐさま奥手稲の小屋での日々が連想されることからして、気のあった仲間と過ごしたりする「時間」というものも、ギッフェルグリュックを創り上げる大切な要素なのだと思う。



こんな言葉を使っていたこともほぼ忘れていたある日、それはちょうど学生のころから数え30年ほどたってドイツの田園を歩いていた時だが、ギッフェルグリュックのもっとぴったりする言葉も思いついたのだ。「至福」である。至福とは、自我を越えた本当の自分が宇宙と一体であることをわかった状態、だとされる。私が歩いていたドイツの田園は、そこに立つだけで気分が爽快になる土地で、田園や林を眺め歩いているうちに、至福の状態に導かれていくのがわかるのだった。

どうして、今いる保養地が快いのか。どうも緑の環境や景観だけでは説明のつかない、もうひとつのエネルギーをそこで感じていたのである。それは何だろう、散歩しながら私は自問していた。そして思いあたった。この感覚が、日本で言うイヤシロチではないのだろうか。実は、ドイツに詳しい九州のある観光カリスマに「ドイツ人は気を見つけるのに長けている」と聞いたことがあった。ドイツのこの保養地は、風光明媚であるばかりでなく、気分を高揚させ、いるだけで元気が湧いてくるような、幸せな気場をともなった「癒しの風土」そのもの、選ばれた土地なのだ。それがすべての意味を繋いでくれた。ギッフェルグリュックが、風土の「気」にたどり着いたのである。至福とは、風土の気とか魂によってもたらされるのではないか…。風土の「気」が積極的に出ている場所で、「気」に弱い感性しかもたない人のスピリットがようやく感応できる、そして結ばれる、一体になる…。

とすれば、山々の中に息づいていたあの場所、あの時間、若い私たちは大地の心に触れていたのではないかと思うのだ。ギッフェルグリュック感覚をさらに具体的に追い求めていくと、個人的には新雪のダウンヒルに飛び出す、あの瞬間ということになる。思い当たらないだろうか、奥手稲のあの小さなスロープの頂に独りで立ち、今まさに処女雪の世界

に踏み込もうとするあの刹那。あれはまぎれもない大地との一体感だ。つまり天に舞い上がるような至福をからだで感じ取っていたのである。ちょうど、自然の寵児のように、である。

だから、あんな、小さなスロープでも最上級の呼称である「ユートピア・ゲレンデ」と呼ばれ続けてきたのだ、と今になって思う。新雪のダウンヒル、あれはもはや単なるスポーツではなかった。それはきっと、技術的に高いレベルのサーファーが、大きな波をくぐるときに神々しい忘我の状態にあるという事実はどこか似ている。

実にまじめに山々を歩いたその後も私の自然の遍歴は続いたが、やがて、激しい動的な山々から次第に静かで身近な丘や川など穏やかな世界に下りてきて、それらはいつしか、里山とか裏山とか呼ばれるゾーンに変わってきた。それは若いころ、自分が将来の自分の山々を想像した通りになった。二〇歳前後の私は、早晚「ウラヤマニスト」になるだろうと公言していたのだ。うまくできたことに、加齢に伴う知恵と感性は、そんな里山や裏山においてもギップフェルグリュックを嗅ぎ取ることができるように備わっている。自然の創造主はそういう風にしつらえてくれたのだと思う。しかも、若い日のギップフェルグリュックは激しく刹那的なもので、かつ、本人は確たる自覚もない混沌の中にあっただのに対して、五〇を過ぎた今は、継続した「至福の状態」を深く求め、自覚的だ。

そしてそこでは、山の自然の主役のひとつである樹木とか林との付き合いに特化されてきた。もともと、わたしは山に登りたいがために森林を扱う学科を選び、その学科の卒論では、森林美を類型化するテーマを選んで冬山に行かざるを得ない状況をつくったりしたが、やはり樹木が象徴する自然に惹かれていたのだと思う。だから、本当のところは色いろな林に出会うために山に登っていたのかもしれない。山でも丘でも平地でも良かったのだ。ともかく、その部分は萎まずに今日まで続いたことになる。そんな森や山のネーチャーも自然だが、「自分のからだこそ自然そのものである」と実感するようになって、自然観は大きく変貌することになった。また遠い山々に出かける必要も薄れてきた。

これもひとつの生長であると思う。若いころの自分たちが、山々で至福の時間を過ごしていたのだ、と過去の出来事として実感するのも悪くない。むしろ、こころ安らぐひと時かも知れない。かたやでは、至福の状態に至ること自体が、人間の生きる意味だという。これはギップフェルグリュックを目指せ、というメッセージだと受けとめたい。恐らく、若いころに山々で至福を嗅ぎ取った者の多くは、私にとっての里山と同様、もうひとつの至福のステージをどこかに求めているのではないか。そしてこの感覚は、地球環境との折り合いという、極めて今日的な問題に答える数少ない「解」を秘めていると私は思う。

(2005/01/23)